Udai 教育セミナーレポート

対話による授業

～学生の考えを引き出すための問いかけ力～

話題提供者：教育学研究科（教職大学院）　教授　青柳　宏

日時・場所　平成 27 年7月23日（木）　16:15～16:45

場所　峰町 5 号館ラーニング・コモンズ2　参加対象　本学教職員、学生

Ｕｄａｉ教育セミナー開催の趣旨

宇都宮大学は、平成 26 年 度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」に採択されました。新たな地域社会の変革を担うべく主体的に挑戦し（Challenge）、自らを変え（Change）、社会に貢献（Contribution）する人材を養成するために、従来の学力に加えて「行動的知性」の伸長を図ることを目指しています。

本学の多様な授業実践の成果と課題を共有することを目的に、Udai教育セミナーを定期的に開催しています。第5回は、教育学研究科（教職大学院）・教授の青柳宏先生により、学生の考えを引き出すために、どのような問いかけや対話を心がけているのか、具体的な実践も含めてお話頂きました。

問いかけのための資料

今回のセミナーでは、ゼミで青柳先生自身が発表された資料をもとに話題が提供されました。分担者が特定の本や記事を取り上げ、考えたことを20分程度で発表し、残りの70分を全体で議論する授業だそうです。ゼミのメンバーには、一般の学生に加えて、外国人留学生や教員など内地留学生も含まれおり、さまざまな立場からの考えや意見が出るそうです。

授業で使った資料として、大学改革の方向性に関する対談記事（『朝日新聞』2015年.6月8日.朝刊）、出産による進路変更と夢を見つける過程の相関を紹介する記事（『朝日新聞』2015.5.23.朝刊）、同新聞に掲載されている「折々のことば」をピックアップしたものが示されました。主に教員を目指している学生を対象としていることから、大学教育をとりまく動向も関連があるのではないかと思い、このような資料を選んだとのことです。

対話的な人格形成

今日の大学では、コミュニケーション力や知識運用力を備えることを目標に、ディスカッションが取り入れられる傾向があります。それに対して、青柳先生が対話を重視する理由として、以下を挙げられました。

問合せ先：宇都宮大学基盤教育センター　長谷川　詩織（haseshiori@cc）桑島 英理佳（kuwajima@cc）

対話を取り入れる理由
知識を活用するためではない
➡「対話的な人格」を形成するため!

今回のセミナーには、内地留学で青柳先生の授業を履修していた現職教員がおり、授業の様子を話して頂きました。

授業中、議論が白熱し、声を震わせて反論する学生もいたそうです。そのとき、他の学生は蚊帳の外にいる状態になりました。しかし、途中で教員から「みなさんはどう思いますか」と問いかけられるため、自分が対話に入り込むことができず、立ち位置が見えなくなっていることに気が付いたそうです。言葉を発信している人だけではなく、それを聴いている人も含めて、対話が行われていることを実感したと話されました。

また、対話を重視した場合、話題がどのような方向に向かうのか予期することはできません。当然のことながら、話題がそれたり、想定していない方向に向かったりします。そこで授業の最後には、以下のことをするそうです。

対話を通じて出てきた議論の内容を総括する。
➡ 一貫性がないように見えても、実はつながっていることを、最後に学生に示す。

複数の人の意見がバラバラに出されているように見えても、いろいろな形で関連し合っていることに、学生が気づくことを期待しているそうです。

対話と学生に対するケア

授業に対話を取り入れた場合、学生が自身の過去や経験を振り返り、それに基づく発言を求めることにもなります。そのときの留意点として、「スクールカースト」を取り上げた授業が事例として取り上げられました。

日本の学校空間のなかで発生する学生の序列は、授業を受けている学生の大部分が経験しています。スクールカーストがあったためクラスに馴染めなかった思い出を持つ学生がいる一方、それに対して問題意識が希薄な学生もいるそうです。そのとき、「どう思う？」と問いかけたくなりがちですが、そのような問いかけはあえて行わないそうです。むしろ、学生の不全感は何に起因しているのか、それを見つけ出すために対話をするとおっしゃっていました。

しかしながら、どうしても受け入れられない考え方が出されたとき、どうしてそのように思うのか本音を聞き出すなかで、意見が対立することもあるそうです。教員の意見に合わせるのではなく、相手の価値観を受け止めたうえで対話することの大切さを伝えるために、対立的な状況も大切にしているとのことです。

大教室における対話

今回のセミナーで紹介されたのは、ゼミ形式の授業における実践ですが、100人以上の多人数の授業の場合は、やや異なる方法を採用しているとのことです。

出席カードの空きスペースにリフレクションを記入してもらい、そのいくつかをピックアップした資料を、次回の授業で配布するそうです。授業を履修したことがある参加者は、かなり挑発的な記述内容も掲載しており、とても驚いたと回想されました。

この点について、その学生は以下のようなことを学んだのではないかと回答されました。

発言・記述内容は、教室内では公共性を持つ。
➡ 配布資料を通じて自分の記述内容を客観的に見る機会を得る。
➡ 自分の考えを発信することには「責任」が伴うことを学ぶ。

多人数の授業では、教員と学生の双方向の対話が少なくなりがちですが、リフレクションとフィードバックを取り入れることで、少人数とは異なる対話が成り立ったのではないかと感じました。

質疑応答（抜粋）

今回のセミナーは、参加者の立場や背景が多様であったこともあり、大学教育に限定されない幅広い議論が行われました。

ひとつは、対話を通じて身に付けた力が、大学卒業後の仕事現場でいかに発揮されるのかという問題です。例えば、教育現場では、教員の尺度では収まらないことが発生することも少なくありません。どのような解決策があるのか、教員同士で話し合うなかで、チ

問合せ先：宇都宮大学基盤教育センター　長谷川　詩織（haseshiori@cc）桑島 英理佳（kuwajima@cc）

ームワークが形成されます。教育現場で仕事をされている参加者から、その過程で対話が効果を発揮しているように感じるという意見が出されました。

もうひとつは、地域のさまざまな利害関係を調整する役割を担う際、対話する力を備えることが重要であるという指摘です。一定の方針を打ち出すまでの過程で、特定の立場を排除するのではなく、互いの立場を理解したうえで、物事を進めることが理想的です。そのため、大学にいるときに対話を経験することは、地域に貢献できる人材の育成につながる可能性を秘めているという声を頂きました。

さまざまな人間関係や状況下で対話する経験を重ねることは、学生が自分自身を見つめるきっかけになると共に、複雑化する社会において力を発揮するための基礎力になるのではないかと、今回のセミナーの話題提供および質疑応答を通じて感じることができました。

（報告:長谷川詩織）

問合せ先：宇都宮大学基盤教育センター　長谷川　詩織（haseshiori@cc）桑島 英理佳（kuwajima@cc）